

大学等名	東京芸術大学
テーマ名	テーマ1：地域活性化への貢献
取組名称	取手アートプロジェクトと地域文化の活性化
取組学部等	美術学部先端芸術表現科・音楽学部音楽環境創造科
取組担当者	渡辺好明（美術学部教授）・熊倉純子（音楽学部准教授）
取組期間	平成16年度～平成18年度
Webサイト	<a href="http://www.geidai.ac.jp/guide/program/index.html">http://www.geidai.ac.jp/guide/program/index.html</a>

### 取組の概要

芸術は作り手（作家）のみによってなされるものではありません。作家の創造活動を育み支えるための社会的な仕組み作りが必要不可欠です。多くの優れた芸術家を輩出してきた本学にとっても、地域社会における芸術の活性化、文化的な社会基盤の整備や振興に取り組むことは国立の芸術大学としての使命です。

東京芸術大学と取手市行政機関（市役所、教育委員会・取手市文化事業団）および市民（アート取手・とりで美術作家展）が実行委員会を組織し、平成11年より毎年行なっている文化事業である取手アートプロジェクト（以下、通称 TAP）では、若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、広く市民に芸術を身近に触れる機会を提供することで、市民の支持や協力を広げることにより、地域文化の活性化をはかるうとしています。本学（教員・学生）、取手市（教育委員会文化芸術課）および市民ボランティアからなる運営スタッフが合同で実施本部を組織し、毎年11月に市内全域で開催される本展に向けて、それぞれ異なった立場から意見を戦わせながら毎年の企画を練り、3者の緊密な連携のもとに運営を継続的に担って実績を重ねてきたという点で、他に類例を見ないユニークな取組みと言えましょう。本学からは美術学部先端芸術表現科、音楽学部からは音楽環境創造科の教員が中心となり、それぞれ授業の一環として企画・運営に取り組んでいます。そこでは、作家や学生のみならず、受け手（観客）やつなぎ手（アートコーディネーターやマネージャー）を育てることもプロジェクトの大きな目標となっています。

現代 GP では、TAP の企画・運営の中核を担う「TAP 実施本部運営」、市内に恒常的な展示ギャラリーを設けて若い作家の企画展を通年で開催する「TAP サテライトギャラリー」、そして TAP の活動を記録し公開していく「TAP アーカイヴス」および「アートプロジェクトに関する調査・研究」に対して、重点的な支援を3年間（平成16、17、18年度）受けることが出来ました。

### 実施の経緯・過程

#### 平成16年度

##### 「TAP2004 実施本部運営」

実施本部は、取手アートプロジェクト実行委員会の実施組織として、年間を通して TAP の企画、運営を担っています。本年度は主要事業として「1/2 のゆるやかさ」と題して11月13日から28日にかけて週末の9日間行われた全国公募による野外アート展「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」および関連事業の市内小学校全校の1年生全員による児童画展の開催などを行ないました。

実施本部には本学から担当教員や学生が授業の一環として参加し、文化活動に関心を持つ市民スタッフとともにプロジェクトの運営上必要とされる実務を日々担っています。毎月2回程度開催される運営会議には、取手市民と取手市職員、東京芸術大学関係者の文字通り3者が参加することで、文化芸術がまちに果たしていく役割、そのあり方をめぐって活発な議論が交わされます。

さらに、文化庁からの「文化芸術による創造のまち」支援事業として行なわれたアートマネジメント人材育成事業「TAP 塾」とも連動することにより、本学の学生が、市の内外から参加してくる幅広い年代で様々な経験と高い意欲をもったインターンとともに、実践的に学ぶ機会を提供しています。

##### 「アートプロジェクトに関する調査研究および TAP アーカイブス」

国内外で行なわれている様々なアートプロジェクトが、地域社会とどのような結びつきをもって為されているのかを視察、調査しています。現代 GP 初年度であった平成16年度では関西、九州、ドイ

ツなどを訪ねて実地調査を行い、関係者にインタビューを行いました。そこで得られた知見は以降のTAPや地域文化活性化のための提案などに活かされています。また「TAP アーカイブス」では、TAPの毎年の成果や「調査・研究」で得られた研究成果も含めて整理、保管して、TAP アーカイブスとしての公開を目指しています。

#### 平成 17 年度

##### 「TAP2005 実施本部運営」

TAP2005「はらっぱ経由で逢いましょう」と題して2005年11月12日から27日まで9日間にわたって開催された取手アートプロジェクト2005(以下TAP)の企画・運営を行いました。市町村合併により隣接する藤代町と合併して広範囲となった市内各地域を対象としたTAP2006では、取手駅西口近くの旧茨城県学生寮の建物を「TAP ヒルズ」と名付けて会期中の拠点として、様々な市民文化活動を紹介したり、在住作家のアトリエや市内の見どころを巡る「TAP トラベル」ツアーを企画するなど、従来型の「オープンスタジオ」プログラムにきめ細かな工夫を加えて観客の動員を図り、地域文化活動の普及、活性化に貢献しました。

##### 「TAP サテライトギャラリー」

取手駅東口近くのショッピングセンター5階の空いたフロアに大小2つのホワイトキューブを設置して仮設ながら恒常的なギャラリーとして、年間8回計13の企画展を開催しました。過去のTAP参加作家や取手に縁の深い作家、本学卒業生などを出展者として、アーティストトークやワークショップなども展示と併せて行いました。これにより、質の高い作品鑑賞の場を市民に提供するとともに、展覧会ごとにリーフレットを作成して、若手の作家や評論家の発掘と紹介に努めました。

##### 「調査研究およびTAP アーカイブス」

調査研究として韓国ソウルと近郊の町アンヤン市を訪ね、ソウル市内では各種のオルタナティブスペース、そしてTAPとよく似た野外アートプロジェクトstone and waterが行われているソウル近郊のアンヤン市を訪ねて、それぞれ関係者にインタビューを行いました。

「TAP アーカイブス」に向けては、今日行われているアートプロジェクトの先行事例ともいえる戦後全国各地で行われた先端的芸術運動についての基礎研究も行っており、それらの資料収集、整理を始めています。さらにTAP2005では、Websiteに加えてプロジェクトの進行プロセスを伝えるBlogを公開し、さらに詳細な記録集を作成、発行しました。

#### 平成 18 年度

##### 「TAP2006 実施本部運営」

TAP2006の企画・運営に関する全ての統括業務を行いました。TAP2006は、「一人前のいたずら～仕掛けられた取手」と題して、2006年11月11日から26日まで9日間にわたって、戸頭旧終末処理場(汚水処理場)をメイン会場として、その他市内各所の公園や公共施設などを使って開催されました。TAP2006の特徴は、ヤノベケンジ(現代美術家)、藤本由紀夫(サウンドアーティスト)、野村誠(作曲家)というタイプの異なる3人の著名なアーティストをゲストプロデューサーとして迎えて、「街・音・かたち」をテーマに、作家だけではなく一般市民からも広くアイデアを募集したことにあります。その結果、東京芸術大学大学美術館取手館で8月末に行われたプロポーザル展公開選考会には196組251件と、TAP史上最多の応募があり、本学学生を含む内39組の参加者が選ばれました。本展では、三人のプロデュースにより、それぞれ「終末処理場プロジェクト」「仕掛けられた日常」「仕掛け愛プロジェクトあーだこーだ」と題して、参加者と市民、学生により様々な「仕掛けあい」が市内全域で展開されて、参加作家数、観客動員、スケールともにTAP史上最大規模のイベントとなり、大きな反響を呼びました。

##### 「TAP サテライトギャラリー」

平成17年度に引き続き、取手駅東口近くのショッピングセンター内で、年間8回計14の企画展を開催しました。TAP2006本展に向けてはサテライトギャラリー特別公募を行い、本学大学院生を含む2名の新人作家を取り上げて企画展を開催しました。また、展覧会ごとにリーフレットを作成して、若手の作家や評論家の発掘と紹介に努めました。

##### 「調査研究およびTAP アーカイブス」

韓国を訪ね、光州市立 UIJAE ART STUDIO 主催により平成19年3月28～30日、旧道庁舎で開催され

た 2007 Asian contemporary art exchange workshop に参加しました。TAP のドキュメント展示とシンポジウムでの発表、アジア各国から集まった地域と密接に関係したアートプロジェクト関係者と 3 日間 にわたって活発な意見交換を行いました。

「TAP アーカイブス」では、Website や Blog の公開、DVD での記録を加えた詳細な記録集を作成、発行しました。これら毎年の TAP 記録集（ドキュメントカタログ）およびサテライトの展示リーフレットはまとめて全国の美術館などに送付しており、それぞれ有意義な資料として役立てられます。また、これらの資料を「TAP アーカイブス」として統合して公開する計画であり、そのための作業を継続しています。

#### 目的に対する成果、人材養成面での達成度

##### 「実施本部運営」

TAP の実施本部運営を通して取手アートプロジェクトの企画・運営体制の充実が図られました。長年 TAP に関わってきた学生が、卒業後も引き続き TAP 実施本部の事務局スタッフとして中核を担ってくれたり、また TAP インターン経験者から本学の教育研究助手になったりすることで、大学と TAP との連動性、継続性が図られています。その結果、美術学部および音楽学部の教員と学生が、市民や取手市担当者、インターンなどと一緒に学外で行われている本プロジェクトにスムーズに参加出来るようになっていきます。そして TAP での実践経験は、学生の社会参加や地域に対する意識の向上に大いに役立っており、卒業後、各地の文化施設や美術館、アート NPO などで活躍する人材も出始めています。

##### 「TAP サテライトギャラリー」

年間を通じて学生やインターンが企画運営を担い、広報やダイレクトメール、リーフレットなどの作成にも携わって、その過程で直接作家や評論家などとのやりとりを行ないました。これは、将来美術館やギャラリーの学芸員などを志望する学生にとっては、格好の実習経験となるものです。また、ギャラリーの企画展で取り上げられた学生にとっては、作家としてのデビューといえるものであり、彼らは市民の直接的な反応から創作活動の社会的意味を深く学んだはずで、教員にとっては、企画展で取り上げるべき作家の選定を通じて、より広く若い世代の作家や評論家を見渡すこととなり、今後の教育活動に対して大きな成果となりました。

##### 「各地のアートプロジェクトの調査研究および TAP アーカイブス」

各地のアートプロジェクトとの関係では、とりわけ韓国との交流を深めています。平成 17 年度の調査研究で訪れたアンヤン市の野外アートプロジェクト stone and water との交流が始まり、TAP2006 本展にも来日してくれました。今年 3 月に招待参加した光州で開催された国際ワークショップは、その関係者による企画であり、そこでは韓国のみならずアジア各国のアートプロジェクト関係者と交流することで各国の事情の違いや共通性について意見交換することが出来て、TAP のみならず本学とアジア各地の美術界との国際交流にも発展する成果が得られました。

「TAP アーカイブス」につながる記録集やドキュメント映像は、教材としての利用価値のみならず、編集、作成作業そのものも学生の実習として教育に役立っています。「戦後地方先端芸術資料集成」として学生たちと行なっている各地で行なわれた美術運動に関する研究会は、TAP を始めとして近年各地で行なわれているアートプロジェクトを、あらためて日本の現代美術史の中に正当に位置づけていくための基礎研究として「TAP アーカイブス」と連動して重要な教育研究活動となっています。

#### 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

本学では、本事業などが先行例となり、近隣自治体や地域と連携した事業、活動が積極的に行われるようになっていきます。さらに大学として推進するために社会連携センターが新設されました。そして GP などの競争的資金への応募も多くなっています。

広報活動については、本学ではホームページから本事業および TAP へとリンクを張って新しい情報を提供しています。TAP においては、地域連携を大切にして、全国的なマスコミやアート関係だけではなく、地域のミニコミ紙などにも、こまめに情報提供を行っています。

取手市では、本学が TAP などの連携事業を推進してきた実績や成果を踏まえて、取手駅周辺の中心市街地活性化を目指した「芸術の杜」美術館構想を計画しています。さらには平成 18 年 9 月より足立区北千住に「千住校地」が新設されて、音楽環境創造科が移転したこともあり、常磐線沿線（上野・北千

住・取手など)をつなぐ「JOBAN アートライン構想」が取手市長により提唱されて、本学と沿線自治体や JR 東日本との間で連絡協議会が設けられています。とりわけ柏市では JOBAN アートライン柏実行委員会が早速設立されて、本学教員や学生も加わって活発な地域文化活動を始めています。

また全国各地の芸術系大学でも、地域社会と連携したアートプロジェクトに取り組む事例は確実に増えてきており、今年で9年目を数える TAP は、先導役、モデルケースとして大きな波及効果を与えてきたと言えるでしょう。

#### 学生等の評価

授業においても、しばしば TAP を紹介してレポートを書かせています。身近な場所で開催されているアートプロジェクトであること、年ごとにグレードアップして内外から高い評価を受けていることから学生の関心も高まり、大いに彼らの刺激になっていると思われます。卒業論文や修士論文において TAP を取り上げる例も本学の学生に限らず多くなっており、入学希望者においても、TAP が志望理由になっている例も学部、大学院ともに見られます。

#### 学外からの評価

TAP は毎年、新聞、雑誌、テレビ、ラジオなど多くのメディアに取り上げられて全国的にも大きな注目を集めています。美術界での専門家による評価も年々高まっており「美術手帳」2007 年 1 月号では特集記事が掲載されました。行政的にも注目されて、平成 18 年 11 月には、国土交通省主催の「地域づくり全国交流会議長岡大会」で地域づくり表彰がおこなわれ、「国土交通大臣賞」を受賞しました。取手アートプロジェクトは企画の継続性、単に自らのまちだけにとどまらない広域性、地域の資源を生かした活動であること、創意工夫と発展性、成果が出ていることなどが審査の基準であったと聞いています。さらに、平成 19 年 7 月にはサントリー財団により、全国から推薦された中から 5 つの団体に送られる「サントリー地域文化賞」をいただくことが出来ました。長年の積み重ねがやっと外部からも認められるようになってきています。

アンケートもしばしば行っていますが、基本的に市内全域を扱う野外展であることから、正確な観客動員数のカウントやアンケート回収には難しさがあります。その代わりに観客にモニターとなってもらうことで、観客の関心や動向を知り、その後の改善に反映させています。おおむね好意的な内容がほとんどで、観客としては、市内在住、市外から、年齢、いずれも非常に幅がひろいものとなっています。

#### 取組支援期間終了後の展開

現代 GP が終了しても TAP はもちろん継続されます。今年の TAP は藝大創立 120 周年、JOBAN アートライン、そして来年茨城県で開催される国民文化祭のイベントとしても周囲の期待を集めており、TAP2007「はじまりは隣の家アーティスト」と題して 11 月 8 日～25 日に開催されます。「オープンスタジオ」としてはアトリエ 40 軒、参加作家 70 名以上と最大規模となる予定です。また中心市街地整備に伴い工事現場となった取手駅西口「とりで芸術の杜」芸術館予定地(TAP2005 で利用した通称「はらっぱ」)に「セキスイハイム M1」の中古メタユニットを移設。TAP2007 のインフォメーションセンターとして、ギャラリーやカフェ、ステージなどの機能をもたせながら、市民や学生共同によるワークショップなどを通じて「これからのまちづくり」に関する意見交換の場をつくります。また JOBAN アートラインとして沿線の松戸市、柏市にも M1 を用いたプロジェクトを展開して連携を深めます。

新規事業としては、取手市と本学が UR 都市再生機構の協力により立ち上げる連携事業「井野アーティストヴィレッジ」は、空き店舗となった団地内のショッピングセンター 1 棟を改装して若手アーティストのための共同アトリエとするものです。TAP2007 でお披露目される予定で、30 名以上の若手アーティストが集まる創作活動の拠点として、大きな注目を集めるでしょう。